

「NIM 内分泌・代謝病学」第4版

京都大学総長 井村 裕夫 編集
京都大学教授・病態代謝栄養学 清野 裕

聖マリアンナ医科大学教授・第3内科

斎 藤 宣 彦

最近の内分泌学や代謝病学は、そのコアとなる知識の大部分を分子生物学関係の知見が占めている。そのため、このコアの部分における新たな知見の集積は、周辺の学問に多大な影響を与え、飛躍的な進歩をもたらしている。

20世紀もあと10年というあたりから、この進歩の速度が急加速したように思う。後世の人々は世紀末の大進歩の時代などと呼ぶのかもしれない。それはあたかも、ジャンボ機の離陸のときのように、あのばかどかい銀色の物体が神を恐れる気配など微塵も見せずに、想像をはるかに越えた速度と角度で急上昇していくのにも似ている。そして、油断していると、上昇速度について行けずに振り落とされそうな気持ちにさえなる。評者は、今、この領域の進歩に遅れまいと、新知見という風圧を受けながら、歯をくいしばって尾翼の尻尾のほうにどうにかこうにかしがみついている状態である。

そんなとき、助けの手を差しのべてくれた書物、それがこのたび改訂された本書の第4版である。改訂に

あたり執筆者諸兄は、第4版にはどこまでの先端的知識を収載すべきか、悩み、迷われたのではなかろうか。それは、各章の執筆者が斯界をリードしている方々、つまり先端的知見を創造しつつある方々であるがゆえの悩みではないかと推察する。そしてその方々が、それぞれ熟考の末、ここまでは改訂第4版に収載しよう、この知見は収載を待とうというラインを定めて下さったに違いない。その結果、冗長にならず、それでいて、食後過血糖改善薬やインスリン抵抗性改善薬、レプチンや β_3 アドレナリン受容体などという新しいことにもさりげなく触れている。この抑えた切り具合が、何ともしようどいいのである。このことと、従来どおりのLecture方式を踏襲したこと、この2点が本書を極めて明解なものに仕立て上げた源泉だろうと思う。

第3版と比較してまず目につくことは、各頁から白い部分が少なくなり、字が多くなった。それは内容が豊富になったことを意味しているのだが、字が多くなることによって予

想される読み難さを、今版から2段組にしたことによって見事に回避している。第3版の目次と比べると、今版から新しいいくつかの項目が導入されていることがわかる。なかでも最も目につくのは“アミロイドシス”の章が新たに書き加えられた点である。これによって本書はますます充実したと言える。

卒前の学生の講義やテュートリアル、あるいは臨床実習、いずれの場合にも、單元ごとのLecture方式というスタイルは有用で便利なことには違いない。また、卒後初期内科研修に際しては、本書を治療の実用書とペアで書棚に置くことで利用価値が倍増するはずである。更に本書の生涯教育資源としての有用性も高く評価したい。特に、最近のこの分野はどうなっているのか…と感じはじめた向きには、一度本書をひもとくことをお勧めする。

● B5 頁568 図356 写真85
カラー写真18 2色図356 表166
1997 定価(本体7,500円+税)
〒400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)